

# 聖母の使徒

252 号

2025年10月26日発行  
編集・印刷：  
馬込便り編集グループ

日本聖公会 東京教区 大森聖アグネス教会  
管理牧師 司祭 シモン・ペテロ 上田憲明  
〒143-0025 東京都大田区南馬込 1-58-8  
Tel & Fax (03) 3771-3459  
E メール：[agnes.tko@nskk.org](mailto:agnes.tko@nskk.org)  
ホームページ：[www.nskk.org/tokyo/church/oomori/](http://www.nskk.org/tokyo/church/oomori/)



Anglican Episcopal Church



\*卷頭言\*

『自分の寿命はいつも今日』

司祭 シモン・ペテロ 上田 憲明

人がいつ死ぬかというのは、  
正確に計算し得るのだろうか。

お医者さんに、後一ヶ月の余命と言われた人が、そのXデーが近づくにつれて、誰も助けてあげられないほどのスピリチュアル・ペインの中で苦しみながら亡くなれたりするのを見るとたとえ予想が当たっていたとしても、そういう具体的な月日を余命として告げる必要があつたのだろうかと思う。その一方で病状の経過の重大さを教えてもらわず、誰が見ても、後、何ヶ月も生きられないだろうと思う人が、何年も先まで生きることを前提に話しておられた、というような話を聞くと、非常なきびしさを感じる。

には、生きている者は必ずある  
日に死んでしまう。それは思つ  
てはいる通り、遠い先かもしれない  
いし、明日かもしれないのであ  
る。病気になると、特に重い病  
気になると、余命という話が出  
てくる。余命というのはいつた  
い何であろうか？

上は、ともかくとして、現実の世界では、個人の寿命は今日があつてはじめて存在するのである。私にとつて、寿命という考え方とは今日という一日がどんなに大切な一日であるかということを告げてくれる考え方だと思う。過去は過ぎ去つてしまつて、もう変えられない。明日は予想もしなかつたことが起ころるかもしない。自分に与えられているのは、いつも今日という日だけ。毎日、今日という日が寿命として与えられているのではないだろうか。今日一日も命を寿（ことほ）ぐような日でありますように。

てしまう。もしも今か今かと死ねる時を楽しみにしている人がいるなら、ひょっとしたら、それは寿命と言えるのかもしれない。でも、そもそも寿命といいうのはカウントダウンするものではなく、カウント・アップしていくものであるのではないか、とも思う。

生まれてから今まで、ずっと私たち一人、一日を昨日から今日へと数えてきている。がなければ、今日はなく、今日がなければ、明日はない。理論



写真提供：M.K.